

2002.12.8

爺々騒論

川井 忠彦

現在の日本の危機的状態は、前大戦を体験した我々戦中派には正しく”第二の敗戦”と受け止めざるを得ない。

この日本のタイタニック的危機を救う道は、泰平放漫の世に耽ってきた国民の一人ひとりが現実を直視し、老若男女皆心を一つにして、再建に向けて敢然と立ち向かわざるを得ないのではなかろうか？

今こそ”救国の英雄”の出現が望まれる時機ではあるまいか？

しかしながら、人生の黄昏時にさしかっている我々が出来る事、あるいはなすべき事は何かと考えてみたが、次の様な結論を得た。

世界は現在”情報革命”の嵐の真只中にあり、”ハード”から”ソフト”への急激な価値観の変動が起こり、その結果”物作り世界一”の日本は根底から体制がゆさぶられ、産業の空洞化をして、活力の喪失が起こっている。

しかし、良く考えてみると如何に世界の情報化が進んだとしても、海運業がこの世の中からなくなることはない。従って、我々のライフワークとなった造船工業はグローバル化、統合化を避けられないにしても、同窓各位の生み出されたハード（hard）やソフト（soft）の脳産物は永遠に残しておくべきである。

その成果は、諸氏が健在のうちに後に続く次世代の若手に自ら伝えるか、出来ない場合は、何らかの形でデータベース化し、伝達する義務があると思われる。

（あるいは諸氏の中には、既に実行に移しておられる方がおられるかも知れないが）私も及ばずながら半世紀に亘って行ってきた自分の研究・成果を纏めるべく、努力中である。

以上